

## コロナ禍で孤立した海外日本語教師の共同教材作成 を通じたネットワーク構築プロジェクト

吉井雄樹（西安電子科技大学）

### 1. はじめに

2022年現在、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により世界中で人々の移動が制限されている。日本語教師も例外なく、この影響を受けている。例えば、海外にある教育機関に就職が決まっても、現地の教育機関に行くことができず、テレビ会議システムで部屋から画面越しにオンライン授業を行う教師もいる。実際、筆者は2021年9月から中国の工学系大学の日本語学科で日本語の授業を担当することになったが、1学期が終わった2022年現在も中国の教育現場に1度も行くことができていない。これは、筆者のように新しく日本語教師としてキャリアをスタートさせる初任教师にとって、決して思い描いた順風満帆な出だしとは言えないだろう。これでは、現地の教育現場の教師と直接会って連携したり相談したりすることや、講師控室などでの教育現場の知識の伝搬が難しくなったり、人間関係が希薄化し孤立したりすることもある。また、孤立した状況では、各教師の手持ちにある限られた教材を使用して授業準備を行うことしかできない。そのような状況の世界各地の日本語教師がオンライン上で集まることで、ネットワークを構築し、共有可能なプロトタイプの教材作成を通じた情報交換や交流の場としたいと考え、本プロジェクトを行った。

### 2. プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的はコロナ禍において海外で活躍する日本語教師の情報共有を促進し、それぞれの教育現場における課題に関する理解を深める場を提供することである。

海外でキャリアをスタートさせる教師は、新型コロナウイルス感染拡大の影響による移動制限で海外の所属機関に足を運ぶことができないことがある。本来であれば、海外にある所属機

関で現場のことを少しずつ知り、そこで得た知識の共有や実践の報告ができるはずであった。しかし、直接対面で会えないことから、そのような機会はほぼ皆無になってしまっている。

また、日本にいても、各教師はそれぞれ個別に自宅から授業を行うことになり、お互いの授業実践について話し合う機会も生まれにくい。講師控室などでの相談や雑談で解決できたような小さな事柄も、1人で立ち向かうとなると、かなりの労力と時間が必要になる。そのため、日本国内で移動制限が緩和されたとしても、孤立したなかで授業を行わなければならない。

このような筆者のケースがごくまれというわけではなく、コロナ禍において同じような状況に置かれている日本語教師は少なくないと思われる。このことから、日本語教師がお互いに意見や情報を交換し、それぞれの課題を解決していくことが重要だと考えた。

### 3. プロジェクトの計画

2.で論じた目的からプロジェクトを行うにあたり、主に以下の2つのことを計画した。

1. 海外教育機関でオンライン授業を実施する日本語教師のネットワークの構築
2. オンライン授業に使用するためのプロトタイプの教材の共同作成

1つ目に、海外教育機関でオンライン授業を実施する日本語教師のネットワークの構築である。前述のとおり、日本語教師の中には現場で得た知識の共有や実践の報告が難しい状況下でキャリアをスタートさせる人もいる。そのため、教育現場の課題や現状、解決策の情報の共有と意見交換の場を設けることでネットワークの構築を考えた。

2つ目に、オンライン授業に使用するためのプロトタイプの教材の作成である。オンライン授業では必ずしも対面授業と全く同じ教材が使えるわけではない。そして、これまでの授業形態とは異なる形で授業することは容易ではない。そのため、お互いの授業の工夫や教材などを共有し、改善していくことが望ましいだろう。そこで、本プロジェクトでは各々がオンライン授業で使用している新たな教材や授業の計画、教案などを「プロトタイプの教材」とし、共有することにした。ただし、今回共有された教材はプロトタイプであるため完成されたものではなく、各教師の授業における必要や教育現場の学習環境に応じて改善することが望まれる。

以上、2つの計画を立て、プロジェクトを行うことにした。プロジェクトは3名の日本語教育関係者にお願ひし、協力を得ることになった。その後、さらに日本語教育のICT活用に詳しい日本語関係者1人にお願ひし、協力を得ることになった。プロジェクトの協力者の活動拠点はタイ、中国、ドミニカ共和国、日本である。

#### 4. ネットワーク構築の方法

3.の計画のために、ネットワークの構築の方法として、主に研究会の開催と情報の公開を実施した。

研究会の開催では「日本国内外の日本語教師同士の情報共有や交流」を目的とし、「共同教材作成を通じたネットワーク構築」を目標に2021年9月から2022年1月まで毎月研究会を行った（計5回）。研究会開催の準備として、2021年7月と8月に関係者会議を開き、活動協力者と具体的な活動内容や日程、方法などを相談し決めた（計2回）。また、研究会の開催にあたり「研究会参加者」と「発表者」、「お悩み相談会発題者」を募集し、事前に申し込みをしてもらった。

プロジェクトの情報に関してはホームページとオンラインマガジンによる一般向けの情報公開、および申し込み者のみに共有されたウェブ掲示板による限定公開の2種類で情報を公開した。

ホームページはAdobeのSparkを利用し、プロジェクト概要や研究会参加の募集、スケジュールなどを示し、研究会に参加するための申し込みフォームなどを用意した（図1）<sup>(1)</sup>。

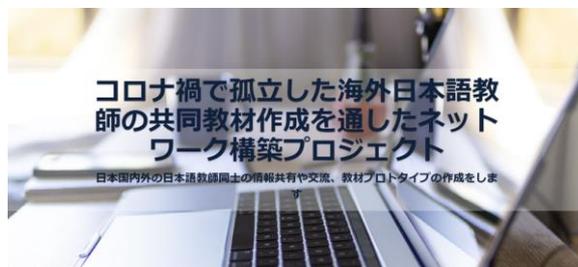


図1 ホームページ

オンラインマガジンはnoteを利用し、研究会の開催情報や発表内容をまとめた記事をオンラインマガジンに収載した（図2）<sup>(2)</sup>。マガジンの名前は「日本語教育グローバル人材奨励プログラム」とした。さらに、オンラインマガジンではプロジェクトの成果をまとめた記事の共有の媒体としても利用した。



図2 オンラインマガジン

限定公開されたウェブ掲示板は、padletのシェルフを利用し、自由交流場や関係者と参加者の自己紹介、プロジェクトと研究会情報、実践例の情報などを共有した。

#### 5. プロジェクトの成果

##### 5.1 研究会の開催

研究会の開催は全5回で、参加者数はそれぞれ、13名、10名、9名、6名、9名で、全体の参加者の延べ数は47名であった。以下、参加者の所属機関の所在地と延べ数を表1に示す。

表 1 研究会の参加者

所属機関の所在地	参加者の延べ数
日本	19
中国	11
タイ	6
インドネシア	5
シンガポール	3
イタリア	3

これまでの研究会の開催の概要は以下のとおりである（表 2）。

表 2 2021 年度の研究会開催の概要

関係者会議	
第1回 (7/25)	参加者は関係者4名で、プロジェクトの趣旨や研究会の流れなどを確認し、プロジェクトを遂行する上で必要なお願いと相談などを行った。
第2回 (8/23)	参加者は関係者3名で、研究会のテーマや内容などを確認し、次回以降の研究会開催に向けて話し合いをした。
研究会	
第1回 (9/20)	<ul style="list-style-type: none"> <li>「学生オフライン教師オンライン型授業の準備における試行錯誤の途中報告」（吉井雄樹）</li> <li>「padletを使ったインタラクティブな漢字授業の準備と実践」（内野里美）</li> </ul>
第2回 (10/18)	<ul style="list-style-type: none"> <li>「授業の中にあるもの考えるための方法」（宮本敬太）</li> </ul>
第3回 (11/23)	<ul style="list-style-type: none"> <li>「わたしとわたしたちの『振り返り』—日本語教育で大切にしてきたこと・していること・していきたいこと—」（末松大貴）</li> </ul>
第4回 (12/19)	<ul style="list-style-type: none"> <li>「コロナ禍のオンライン・マンツーマン会話レッスンにおける課題と実践」（松本あさひ）</li> <li>「中国の大学の日本語会話の授業で教師がしていること」（吉井雄樹・常笑）</li> </ul>
第5回 (1/18)	<ul style="list-style-type: none"> <li>「EdTech使ってみよう！」（内野里美）</li> </ul>

「」内は発表タイトルを示し、（）内は発表者を示す。

参加者の中には筆者と同様に現地の教育現場に足を運ぶことができない初任教师やオンライン授業をしている教師も多数いた。そのような日本語教師が研究会に参加し、お互いに意見や情報を交換ができたことは本プロジェクトが掲げる「コロナ禍において海外で活躍する日本語教師の情報共有を促進し、それぞれの教育現場における課題に関する理解を深める場を提供する」という目的にかなったと思われる。

研究会は毎回10名前後の参加者であったため、決して大規模であったとはいえない。しかし、研究会の参加者がざっくばらんに話し合える雰囲気があり、各々の教育現場の現状や実践、教材、教案などについて話し合うことができた（図 3）。このように、日本国内外で活躍する日本語教師が国境をまたいで、オンライン上で交流の場を持てたことにより、研究会開催の「日本国内外の日本語教師同士の情報共有や交流」という目的と「共同教材作成を通じたネットワーク構築」という目標を達成できたと思われる。

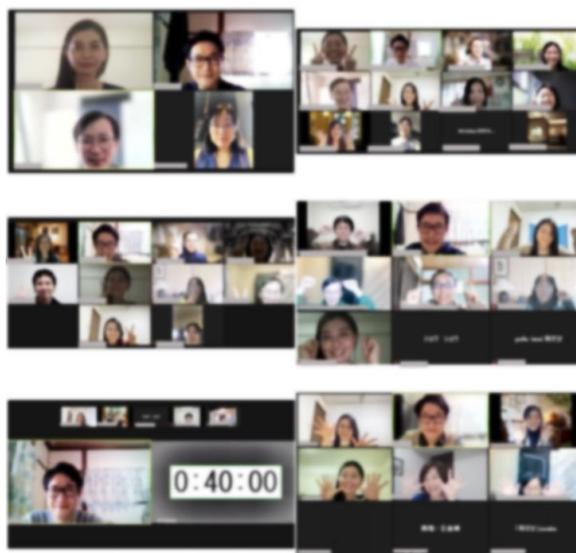


図 3 関係者会議と研究会の様子

左上から右へそれぞれ第1回関係者会議、第1回研究会、第2回研究会、第3回研究会、第4回研究会、第5回研究会のスクリーンショットである。それらを個人が特定できないように編集加工した。撮影は参加前に事前にホームページや申し

込み、リマインドメールなどで記録や公開のために行うことを事前に知らせ、撮影前にも口頭で確認した。

## 5. 2 ウェブ掲示板での交流

ウェブ掲示板ではこれまで多くの投稿やコメント、リアクションなどにより参加者によって交流が行われてきた（図4）。

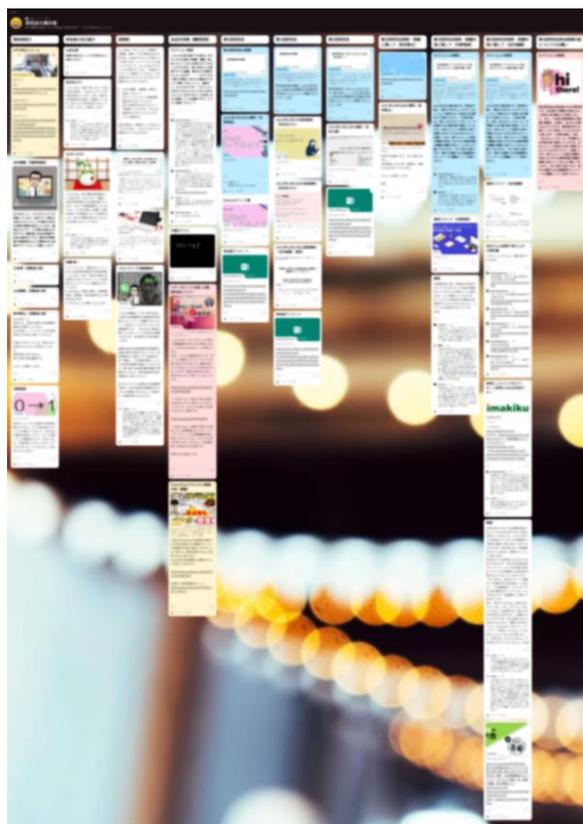


図4 ウェブ掲示板における参加者の交流  
図はウェブ掲示板をスクリーンショットし、個人が特定できないように編集加工したものである。

## 5. 3 プロトタイプ教材

本プロジェクトでは各教師がオンライン授業で使用している新たな教材や授業の計画、教案などを「プロトタイプの教材」とした。そして、研究会の開催と情報の公開によって、プロトタイプ教材を共有した。そのうち、筆者が共有したものを中心に説明する。

まず、筆者は研究会の第1回と第4回で授業実践の報告を行っている。第1回の研究会では

筆者が現在担当している中国の大学の授業の計画や授業の準備方法を述べ、日々の授業準備の試行錯誤の途中報告をした。第4回の研究会では筆頭発表者として発表した。そこでは、コロナ禍における授業の1形態の可能性として、授業実践を報告し、筆者を含む2名の教師がこの授業で何をしているのかを共有した。そして発表時点での課題などを取り上げ、参加者と話し合った。

次に筆者はオンラインマガジンに2つの記事を共有している。それぞれ筆者の教案や使用したICTの紹介についての記事である。以下、共有した記事のタイトルである。

- 「オンライン授業で使った5つのICTの紹介」
- 「【教案】padletを使った日本史のオンライン授業～中国の大学の「日本概況」における実践～」

プロトタイプの動画教材は会話授業の試験の評価基準の説明と会話例を紹介する目的で作成されたものである。以下、プロトタイプの動画教材の静止画（図5）を示す。



図5 動画教材のプロトタイプ

以上、筆者の共有したものを中心に説明したが、その他にも各教師が用いたプロトタイプ教材が多く共有された。これにより、プロジェクトの目的である「日本語教師の情報共有の促進」が行われ、「各教師の教育現場の課題に関する理解を深める場の提供」することができたと考える。

## 6. プロジェクトを通じた参加者の学び

研究会後、参加者に毎回任意でアンケートに協力してもらった（回答数19件）。その結果、参加者は概ね研究会が役に立ったと回答した<sup>3)</sup>。そして、研究会に参加してよかったこととして、新しい知識や教師のつながり、研究会で得たことの活用、自分の授業実践を考えること、モチベーションについての回答を得た（図6）。

新しい知識については、研究会に参加して参考になったことや、何か新しいことを知ることができたとする回答があった。また、意見や情報の交換ができたとする回答もあった。その中には、コロナ禍の他の教師の活動を聞いたことがよかったとする回答もあった。

さらに、個人レベルのつながりができたとする回答や研究会で得たことを活用できたとする回答もあり、教師同士が意見や情報を交換し、新しい情報を得たことやその過程で、教師のつながりやその知識の活用につながったのではないと思われる。

また、研究会の発表を聞いて自分の授業実践について客観的に見る機会や、考えさせられたとする回答や、発表の準備などが自分の振り返りや参加者の反応を知ることになったとする回答もあった。これは教師が成長するうえで重要だと思われる。

モチベーションについては、研究会に参加することが精神的に心強かった、またはアットホームなコミュニティがあるということが、モチベーションにつながったり、新しいアイデアが生まれやすくなったとする回答もあった。

以上、アンケートの結果から研究会に参加してよかったことをまとめた。研究会に参加した教師がお互いに意見や情報を交換し、新しい情報を得ることができたこと、そして、その過程で教師間のネットワークや研究会で得た知識を参加者の教育現場で活用できたことが示唆された。その点で、本プロジェクトの目的を達成できたと思われる。

さらに、教師が成長するうえで重要だと思われる自分の授業実践を考える機会になったなどの回答を得られたことは大変うれしいことであ

る。また、筆者と同じような境遇にたたされている教師のモチベーションに少しでも助けにされたなら感激である。

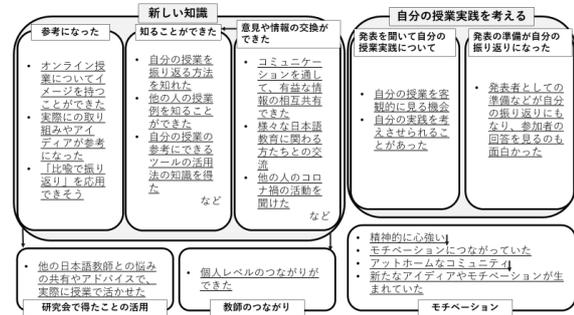


図6 アンケートの回答から  
 研究会に参加してよかったことのまとめ

## 7. 今後の展望と課題

今後の展望として、継続して教師同士をつなげる活動を何らかの形で行っていきたいと考えている。なぜなら、2022年現在においても今後の状況が不透明であり、日本語教師がお互いに意見や情報を交換し、それぞれの課題を解決していくことが重要だと考えるからである。活動を継続するうえで、筆者自身の教育現場の課題だけでなく、さらに視野を広げ、他の教師が抱える課題や悩み、その解決例などを知ることが必要だと思われる。そこで、6.と同様のアンケートで教育現場での悩みやその解決例を聞いた結果をまとめることにした（図7）。

アンケートの結果から、大きなグループとしてオンラインに関する悩みをあげることができる。この中には、オンライン上のつながりや授業に関する悩みがあった。オンライン上のつながりに関して、教師のつながりと学習者のつながりに対するものがあつた。教師のつながりに関しては、教師間のコミュニケーションが無いことやほかの教師との接点が少ないこと、オンライン授業についての情報交換の機会についてなどが触れられていた。オンライン上の学習者のつながりに関しては、解決策としてビデオや音声の投稿を試みるが、さらにグループワークを進めるにあたり、年齢や興味が違う人同士でもできる活動を模索しているとする回答があつた。

た。オンラインに関する悩みの中で授業に関する悩みとして、オンラインで学生の名前が覚えにくいことや、ブレイクアウトルームが効果的に使えるかという悩み、方法や工夫に関する悩みが回答でみられた。

授業に関する悩みはオンライン授業に移行したことによるものだけでなく、授業全般的な悩みもみられた。その中には、興味やレベルに差のある学習者がいる授業の組み立てや、授業中の発言を活発化することで発言する人が限定されてしまうこと、授業の方法や工夫に関する悩みが回答にあった。そのほかに、アフターコロナの不安も回答に寄せられた。

以上のように、コロナ禍の日本語教師が抱える悩みや不安などは多岐にわたり、情報や意見交換の機会が必要だと思われる。

一方で、今後活動をするにあたり、今回の活動の課題を参考にする必要があるだろう。例えば、ただ研究会の開催をするだけでなく、何らかの枠組みなどに基づき、参加者と一緒に各自の授業をより効果的で建設的に改善していくこともできたと思われる。

その際、プロジェクトにかかわる人たちの活動の場所が様々であるため、特に時差によって、オンライン上で1度に集まるのが難しいことがある。これにより、時折、関係者会議や事務連絡を個別で行う必要があった。その点、時差を考慮して会議や研究会の予定を組んだり、会議の司会やホストなどを適宜順番に変えたりすることで改善できたかもしれない。

また、プロジェクトのお知らせを発信する媒体として、掲示板やホームページ、メーリングリストなどを使ったが、これらを一括して管理することで作業の効率化につなげることができたかもしれない。

今後このような活動を行う中で、以上のような課題があることを把握し、実行していく必要があるだろう。



図7 アンケートの結果から研究会の参加者の教育現場での悩みやその解決例のまとめ

## 8. おわりに

本プロジェクトではコロナ禍で孤立している日本語教師が国境をまたいでオンラインで集まり、ネットワークを構築し、共有可能なプロトタイプ教材の作成を通じて情報交換や交流の場としたいと考え、主に研究会の開催と情報の公開を実施した。その結果、全5回の研究会の開催で延べ数47名の参加と7件の発表や発題があり、参加した多くの人から役に立ったという回答が得られた。ざっくばらんな雰囲気の中、活発に情報や意見を交換し、新しい情報を得ることができたこと、そしてその過程で教師のネットワークの構築や研究会で得た知識を参加者の教育現場に活用できたことが示唆された。さらに、自分の授業実践を考える機会や教師のモチベーションにつながったという回答も得られた。

本プロジェクトの目的は「日本語教師の情報共有の促進」と「各教師の教育現場の課題に関する理解を深める場の提供」であった。以上のような目的は研究会の開催や情報の公開などで達成できたと思われる。

筆者自身も本プロジェクトを通じて、日々の授業で直面する悩みや疑問の相談や助言などをもたらえる場として、また研究会で得た情報は自分の実践に活かすことができた。また、現地にもいけず、日本にいても所属意識というものが希薄になりやすいなかで、研究会という集まりがあることで心の支えにもなった。

筆者は日本語教授経験が浅いが、初任であるからこそ日々の授業実践に挑むことは刺激的であった。そして、プロジェクトの中心として活

動し、活動協力者と相談しながら研究会を開催できたことは貴重な経験であった。

本プロジェクトの研究会は毎回10名前後の参加であったが、筆者の実施可能な範囲でプロジェクトの目的などを吟味し、計画を立て、研究会の開催などで、それらを達成できたことは自信にもつながった。

筆者自身も今後活動を続けていくつもりだが、同じような立場の日本語教師が研究会の開催な

どを実施する際の一助になれば感激である。研究会を開くことに特別な知識や優れた業績はあまり必要ではないと思われる。特に初任教師であれば、日々の授業実践のちょっとしたことに困っていたり、相談したいことが出てきたりする。そんな時に、同じ立場で話し合える機会が重要であるだろう。その際に、本プロジェクトに必要な応じて修正などを加えてご自身のプロジェクトに役立ててもらえると感激である。

## 注

- (1) ホームページのリンク (<https://spark.adobe.com/page/eUsvaX3mk1Kxd/>)
- (2) オンラインマガジンのリンク ([https://note.com/you\\_ki441/m/m7691417194d9](https://note.com/you_ki441/m/m7691417194d9))
- (3) 5点満点中、平均4.84、標準偏差0.36であった。

## 謝辞

本プロジェクトは日本語教育学会の「2021年度日本語教育グローバル人材奨励プログラム」に採択され、助成を受けました。活動協力者の王金博先生、宮本敬太先生、山本綾香先生にはプロジェクトの準備段階や関係者会議からご協力いただき、研究会の開催などにおいてもご尽力いただきました。内野里美先生にも活動協力者と同様にご協力とご尽力いただきました。また、研究会に参加してくださった方々と多くの意見や情報の交換をすることができました。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。